



2011年6月 シャミナード年

## ギョーム・ヨゼフ・シャミナードと共に マリア的、宣教的な教会に向けて

シャミナード神父は、本業としての神学者ではありませんでした。彼は活動家、人の霊的司牧者でした。あるマリア論や教会論をはっきりと述べなかつたにしても、マリアについての考えと親密に結びついた教会についてははっきりとした考えをもっていました。こうした考えは40年間以上にわたった彼のマリア的、教會的な経験の結実でした。その経験を通じてシャミナード神父は、マリアに照らして教会を見ていました。彼にはマリア自身も、キリストの神秘及び教會の神秘と結びついたように見えました。



1) マリアに対する崇敬及び信心は、より良く表現すると、**教會の典礼におけるマリアの存在**は、教會の生活に人々を積極的に参加させたものでした。このマリア崇敬及び信心は、何よりも人々をキリストに向けさせ、神の国の実現のために働くように向けさせたものでした。そのため、マリア信心は、聖霊が教會に働きかける（語りかける）一つの時のしるしです。

“主の霊はあらゆる方面から無原罪の御宿りの配偶者に対する最も優しい献身の感情を目覚めさせ、信徒は特別の信心の対象である神の母への崇敬によって要請される特別の心身をマリアになす熱意を抱きます。今日、マリアに対する愛と尊敬の賛辞をこの特別の秘儀になす榮譽と慰めを見いださない真のカトリック信者はいません。今まで私たちが少なくともそれほど感動的に気づかなかつたことは至聖なる乙女への奉仕に献身することを青少年が示した熱意と高尚な競争心です。このことは感じやすいすべての信者にとって感動的な模範です。”

(マリアに関する記録、第2部、No. 388)

2) **教會におけるマリアの存在は、いつも母性的なものでした。**マリアはイエスの母であり、そして私たちがイエスと一致しているならば、私たちの母でもあります。これはキリストの（神秘）体の教會的な現実です。マリア及び聖霊は、キリスト信者をキリストの似姿に養成します。教會の歴史におけるマリアの母としての活躍を通じて、信者たちは具体的に悪の勢力と戦う上で救いというものがどういう意義をもつのかを体験できます。

“マリアの胎内に宿されたのはイエス・キリストご自身とイエス・キリストの命を生きる者のみである。マリアは想像に絶する愛によって私たちが子供としてその純潔な胎内に宿し、その御子の主要の特徴ではぐくみ、御子のように私たちをお産みになった。マリアは聖パウロの次の言葉を絶えず私たちに繰り返している。「わたしの子共たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしはもう一度あなたがたを生もうと苦しんでいます」（ガラテヤの信徒への手紙4章19節）と。”

“マリアの子共であることを宣言する修道者は絶えずイエス・キリストの生き方を観想し、イエス・キリストの生き方と自分の生き方を比較しなければならない。それによって修道者は自らがマリアの子共としてふさわしいかどうか、また、尊い御母の考えや感情が理解出来ているかどうか分かるに違いない。マリアは何時、何処で、尊い御子をお産みになったか考えなければならない。”

(マリアに関する記録、第2部、Nos. 659-660)



“・・・マリアは戦闘教会にとって常に満ちた母でした。マリアはその慈悲のみ心を常に教会に開いていました。それはすべての信者が充満する恩恵の中からくみ取ることが出来るためでした。捕らわれ人はマリアによって自由の身となり、病人は回復され、虐げられている人は慰められ、罪人はゆるされ、義人は恩恵を頂き、天使は喜び、尊い至聖三位は栄光をえました。”

(マリアに関する記録、第2部、No. 389)

**3) 救いの歴史を通じて、また教会の歴史を通じて行われてきたあの戦いにおいては、マリアは、私たちの協力を必要としています。**この(戦いの)場にこそシャミナード神父は、マリアニスト家族の役割(使命)があると考えました。教会と共に、マリアと共に、またキリストと共に私たちは、神の国を築き上げることに協力します。私たちは皆、宣教する教会のなかの宣教者です。

“教会はあらゆる時代に戦いと聖母マリアの輝かしい勝利を経験してきました。主がマリアと蛇の間に敵対関係を定められて以来、マリアはいつも世と地獄に打ち勝ってこられました。教会が語るころでは、すべての異端はいと聖なるおとめの前には頭を下げ、マリアは徐々にそれらを壊滅させたのです。

ところで、現代はびこる大きな異端は宗教的無関心で、これは人々を麻薬的な利己主義と消耗をもたらす激しい情念のうちに呑み込みつつあります。・・・

けれども、現代についての悲しくも如実なこの描写は私たちを失望させるものではありません。マリアの力は衰えていません。私たちはマリアが他のもの同様にこの異端に打ち勝つことを固く信じています。なぜなら、かつてと同じく今日でも、マリアは卓越した婦人、蛇の頭を打ち砕くために約束されたあの婦人であることに変わりはないからです。そしてイエス・キリストは、マリアをいつもこの偉大な名でお呼びしながら、私たちにマリアは教会にとっては希望、喜び、命、地獄にとっては恐怖であることを教えておられます。ですから、まさしくマリアには、現代も、偉大な勝利が予想されているのです。私たちの間で沈没の危険にある信仰を救いだす栄光はマリアの手にあります。

・・・私たちに神のこのお考えが分かりました。それで、私たちは嬉々としてマリアに私たちの取るに足りない労苦をささげ、その御命令の下に働き、その傍らで戦っているのです。私たちはその旗下にその兵士、その奉仕者として召集され、地獄に対するその崇高な戦いに加わり、堅忍という特別の誓願によって、生涯の終わりまで、全力を尽くしてマリアを補佐すること誓いました。そして、あの有名なある修道会がイエス・キリストのみ名を取り、旗を掲げるように、本会はマリアのみ名を取り、旗を掲げ、マリアがお呼びする所にはどこにでも馳せ参じて、**その崇敬を広め、そうしながら人々のうちに神の国を広めていく覚悟です。**”

(シャミナード師の手紙、第五巻、No. 1163 — 1839年8月24日)



“私たちが信じるころ、現代の大異端に対するマリアの戦いに全力を尽くして協力するためにマリア御自身によって召された私たちの会が標語として掲げているものは、本会会憲が言明するように(第6条)、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と、いと聖なるおとめがカナの召使たちにおっしゃられたお言葉です。

私たちは、私たちの弱さにもかかわらず、私たちの固有の使命は隣人に対して霊生と慈善の業を行うことであると確信しております。そして、そのために、キリスト教教育という一般的名義の下に、隣人を悪の汚染から守り、また癒すあらゆる手段を用います。この精神で私たちはキリスト教教育の特別の誓願を行っています。”

(シャミナード師の手紙、第五巻、No. 1163 — 1839年8月24日)

“本会の事業は偉大で素晴らしいものです。それが普遍的であるのは、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と私たちにおおせになるのは**マリアの宣教師**だからです。マリアは、他ならぬ私たち一人ひとりに、世にいる私たちの兄弟の救いのために働く任務を与えられました。”  
(シャミナード師の手紙、第五巻、No. 1163-1839年8月24日)

**4) 信仰の心構え — それは、マリアのように信者が持って生きていかなければならない心構えです。**  
私たちは、み言葉を受け入れ、黙想し、伝え、私たちの生活（ワールド）に具体化しなければならぬのです。

“「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」(ヨハネによる福音書2章5節)。  
すなわち、イエスがあなた方に命ずることがどのようなことであっても、たとえ理屈に反するよう  
思われても、理屈を言わずにそのとおりにしてください、とおっしゃったのです。

ところで、この言葉は私たちの母である聖なる乙女がその子供たちである私たち自身におっしゃった言葉です。マリアは私たちに御子があなた方に命ずることは何でもしなさい、とおっしゃっています。しかしイエス・キリストは私たちにどのように話されるのでしょうか？信仰を通じてお話になるのです。したがって信仰に耳を傾けてください。信仰に助けを求め、信仰が教えることを実行してください。こうして私たちはイエス・キリストがおっしゃることを実行することが出来るのです。マリア会の精神は信仰の精神です。信仰を通して神に到達しなければなりません。”  
(マリアに関する記録、第2部、Nos. 833-834)

“尊いマリアに対するあなたの愛は常に成長しているように思います。そのことについて御主に感謝しています。マリアへの愛をあなたに鼓吹するのはイエス・キリストであり、むしろ、イエス・キリストご自身が至聖なるマリアに対して持っている愛をあなたの忠実さの度合いに応じて少しずつあなたに鼓吹されるのです。マリアに対するキリストの愛はそのご託身の永遠の計画によって永遠です。”

“このご託身の秘義はキリスが御母に対して抱いておられた永遠の愛によって、キリストの聖なる人生が形作られることによってのみ成就したのです。私がしばらく前から、そしてごく最近感動してやまないことは、ご託身の際、マリアがその信じられないほどの愛によって駆り立てられた生き生きとした信仰によって、御子の御父からの永遠の出生に協力されたことであり、尊い御子が取られた人生をお産みになったということです。「あなたの心に、信仰によってキリストが住まわれるように...」(エフェソの信徒への手紙3章17節)。「かれを受け入れた人には、みな神の子となれる能力をさずけられた」(ヨハネによる福音書1章12節)ど、教えられているように、イエス・キリストを私たちの内に宿らせたのもマリアの信仰です。神のすべての宝はマリアが駆り立てられた信仰によってマリアの内にもたらされました。すなわち、マリアはその信仰によって、恩恵に満ち満ちたもの、命の源になりました。マリアが自然界でイエス・キリストを信仰によって宿したように、私たちも霊界でイエス・キリストを信仰によって実際に宿すことが出来るのです・・・私が一言あなたに書いたのは、あなたのマリアへの信頼、その信頼を生かしている愛を何とかかき立てるためでした。”  
(マリアに関する記録、第2部、Nos. 115-116)  
(シャミナード師の手紙、第5巻、No. 1271)

## 5) マリアは、カルワリオの丘の極みまでキリストに従っていく弟子の象りです。

“「わたしはミルラの山に、乳香の丘に登ろう」(雅歌 4章6節)。聖ペトロと共に、「主よ、私たちがここにいるのは、すばらしいことです」(マタイによる福音書 17章4節)と言った他の人々は急いでタボル山に登りました。しかし、わたしはもつ薬の山、カルワリオの丘を選びました。尊いマリアの模範にならって、そこに登ることを決めました。「行きましょう」と、おっしゃったのは、イエス・キリストの真の花嫁であるマリアです。私もその模範になりたいと思います。私はシナイ山より険しいこの山に登り、苦悩と恥辱に身を任せたいと思います。苦しみの母、殉教者の元后と呼ばれた聖なるマリアが選ばれた決断を見て、だれがカルワリオへの道を自制することが出来るでしょうか？一言で言えば、マリアは、カルワリオに、その美しい魂を貫く苦しみの刃の前にぬかずいたのでした。マリアはカルワリオに共償者として行きました。イエス・キリストは人々のために苦しまれたので、人々はその功德の適用を受けるはずでした。マリアは教会を代表していました。それは、マリアが十字架の下でお産みになった信者の母として、また、イエス・キリストが遺言としてそのようにお計らいになった子供たちの母としてです。” (マリアに関する記録、第1部、No. 214)

上記のテーマは、マリアニスト考察のなかにはよく出てくるテーマの一つです。深めていくためには以下の文書をご覧ください。

◎マリア会のマヌエル・コルテス師の回章 (日本語)

<http://www.marianist.jp/sm/kaishou/kaishou1.pdf>

<http://www.marianist.jp/sm/kaishou/kaishou2.pdf>

◎汚れなきマリア修道会の Sr. Annick Robez-Masson, FMI, の論文 (仏語)

<http://www.mundomarianista.org/vivre-en-eglise-a-la-maniere-de-marie/>

### ご考察のための材料:

1. 今までのあなたの人生の中で、マリア様が現存している一つの場面を思い出してください。
2. マリア様という方は、どのようにしてあなたが教会の活動的なメンバーであることを感じさせるのに役立ちますか？
3. あなたにとってマリア様という人物の一番魅力的な側面は何でしょうか？
4. マリア様とのミッションということをごどのように考えていますか？

**6月2日～12日：6月の記念すべき期間：マリアニスト家族での聖霊降臨の準備期間**  
(マリアと使徒たちのように聖霊の降臨を期待する)